

♪ 研修会参加記 ♪



## 研修会に参加して

入田 和恵

東京も栃木も真夏日真っ最中なのに、格が違います。非常に暑い東京に、まず、げんなりしました。気温にして4度位の差でしょうか。数字と体感温度のギャップにいささか戸惑いを覚え、出来るならこの季節は東京になど近寄りたくないと言いました。

ところが医療センターの周りの元気な蝉時雨に感動、そして会場の講堂2面からの障子越しの柔らかな日差しに、これから始まる研修会が日常と違うのだと思いました。非日常のことを「ハレの日」と言うことを思い出し、心を新たに臨もうと思いました。

図書係になって約4ヶ月、業務に慣れるのに精一杯の日々を過ごしていました。今回の研修会参加で、図書室の今後のあり方を考えるよい機会を得られたと思います。日頃の疑問を解決するための窓口も、たくさんいただきました。今までは、無味乾燥な想いを抱きながら知らない人へ文献依頼をしていましたが、これからは違います。ああ、あの時のあの方をお願いするのだ、そう思っただけで、心がずっと軽くなるような気がします。

電子ジャーナルはまだ先、近い将来のために情報を集めていれば大丈夫だと思っていました。それでは遅れすぎだと気がつきました。当院の外国雑誌のフリーオンラインジャーナルは16誌あることがわかったので、いくつかチャレンジをして登録をしてみたいと思います。

また、「医学図書室」を患者様へ公開している病院の様子を知り、インフォームドコンセントの観点からも情報提供のあり方が問われる時代になっていると感じました。

朝日新聞の上野創記者は、ご本人の癌闘病体験をもとにお話をして下さったので、推測がない明快さで、ストーンと心に染みてきました。患者の知りたい気持ちを支援するスペースを広げる必要性を感じました。

私は、町の図書館に月2回ほど行きます。インターネットの検索が出来、蔵書も多いほうで充実していると思います。ただし行政の図書館には限界があって、たとえば病気のことを知りたいと探しても、思うような資料が見つかりません。切羽詰まっていなければあきらめてしまいます。ソフト面の対応も可能な病院の「医学図書館」が地域に根ざしていたら、素晴らしいことだと思います。コストにつながらないことを実現させることは、難しいと思いますが。

現時点での私の懸案事項は、資料整理のあり方です。公共の機関や本社等から病院宛に届く資料が、多少古くなってから図書室に集まってきます。届かないでどこかに眠っている資料もあるのではないかと考えています。それらを職員が共有できる情報として、活用できるようにしたいと思っています。

医療情報のコーディネーターとして、図書業務の果たす役割は重要であると認識をした研修会でした。ありがとうございました。

---

NYUUTA Kazue

大田原赤十字病院 図書室

orchosp@olive.ocn.ne.jp